

# Vocational Guidance に関する人間関係論的研究

## —認知と人間関係—

上 原 貴 夫

Studies on the Vocational Guidance from the View-point of Human Relations  
—Cognition and Human Relations

TAKAO UEHARA<sup>\*</sup>

### 目 次

#### 序

- 第一節 ガイダンスにおける基礎的認識
- 第二節 人間関係における認知の位置づけ
- 第三節 ガイダンスとパーソナリティ形成
- 第四節 総括・結語

### 序

ガイダンス (Guidance) の現状を見た場合、それは認知論 (cognitive theory) の観点から捉えられる傾向にある。同時にこのことは、ガイダンスにおける人間関係論的視座の重要性を説明化させることになってきているといえる。

このような動向は、様々な要因によってもたらされるが、それらの主要な要因を大別するならば、次のような諸相を見い出すことができる。すなわち、現代の人間を取巻く社会状況、人間観の変遷、人間関係論究の進展、そしてこれらと緊密な関係を保ちながら進められてきているガイダンス自体が持つ動向を見ることができる。これらは、それぞれに独自な特性を示しながらも、相互に関連しあいながら、ガイダンスにおける統一的な動向を形造っている。

人間と社会との結びつきは、現代において増々強められ、その重要性は増大してきている。人間は、個人として独立した存在であり、自律的な生活を営む存在であるが、それにもかかわらず社会との一体性が要求される。それは、多くの他の動物が集団の力によって、種の保存をはかる以上のものである。

技術革新が進み、高度な産業社会を形成する現代にあっては、人間が人間としての満足な文化的生活を営む上で、社会との結びつきは不可欠のものとなっている。それは、毎日の生活における食糧の獲得、それを加工するエネルギーの供給までも社会に依存しているように、人間にとって基本的な生存の維持にまでわたるものである。他方、人間は、社会との結びつき

---

<sup>\*</sup>Doctor of Education

を通して、自己の行動を拡大し、また様々な文化的恩恵に浴し、豊かな精神生活を営んでいる。これは、自己の主体的な努力と同時に、社会との結びつきがあるからこそ可能であるといえる。

人間が自己の生存さえも社会に依存することは、一面においては人間に対する社会の制約性を示すものである。そこにおいて人間は限定的に生活するといえる。反面、人間は社会を通して、先に示したように、個としての生活を拡充することが可能となる。そこにおいて人間は、無限の可能性を秘めた存在として生活する。

もちろん、このような社会を構成するのは人間に他ならない。社会は人間によって形成され、そこに生活する人間によって特徴づけられる。社会が、その存在を維持し、更に進歩発展を遂げるためには、新たな成員が供給されなければならない。しかも、その成員としては、その社会に適応し、更に社会の進歩発展を実現することができる能力、資質を備えた者が要求される。所属成員の問題は、社会にとって重大な関心事である。それは、今後とも増幅されることはあっても、縮小されることはあり得ないと考えられる。

人間と社会は、このように相互の関係にある。両者の一体性は、相互に追求されるものであるといえる。両者のこのような関係にある時、現代の社会状況は、人間のあり方とより緊密な関係を有する。それらの中には、そのまま、個人あるいは集団を対象としたガイダンスの必要性をあらわすものを見い出すこともできる。

現代社会の特徴として、その柔構造性が指摘される。これは、社会制度や社会体制についても指摘されるが、いわゆる価値観の多様性とも見ることもできる。価値観自体は、人間の認識面、精神面とのかかわりのもとに捉えられることが多いが、実際の生活において捉えるならば、それは各人における行動規範として、一つの準拠枠（frame of reference）を示すものとして捉えられる。従って、その多様性は、行動や生活意識等の多様性を示すものであるといえる。特定の画一的な価値ではなく、多様な価値が様々な人に柔軟に受け容れられることは、現代社会の特徴の一つであるが、反対に、このことは個人における自己の進路の決定を誤らせる結果を生む一因となっている。その原因としては様々な考えられるが、中でも現代社会に特徴的な要因として、価値観の多様性に見られるように、個人のあり方を規定する準拠枠の多様性が、却ってその進路を誤らせたり、あるいはその選択を曖昧にしたりしている面があるといえる。

同様のことは、情報の多様性についても指摘される。現代は、情報洪水の時代といわれる。それは、その内容と量について特に見い出される。多様な内容と膨大な量を持った情報が効果的に活用されるためには、その質的な面も問題であるが、同時に受ける側の者としては、その選択と解釈、そしてそれを実際の生活に用いるための能力が必要とされる。その活用が効果的に行われないならば、やはりそこには誤った意識の形成や行動の実現が生ずることになる。

また、現代社会は従来に比してきわめて流動的であり、また自己の職業、進路の選択が柔軟にかつ多様に決定され得る要因が備わっている。それは、個人が自己の能力、適性、自己の欲求に従って自由にそれらを決定することができる可能性をもたらしものでもある。それは、自己の人格（personality）に応じた行動の決定、あるいは進路の決定を可能にするものであると換言できる。

このような社会状況のもとに、ガイダンスの重要性は増々高められてきている。換言するならば、ガイダンスを通して、個人の望ましい成長を促し、個人の人格に応じた進路を決定する必要性が生じてきている。それは、個人の能力の十全な伸張をはかり、個人の人格に応じた自己実現を追求するものであるといえる。同時にそれは、個人の社会化（socialize）を実現し、それを通して、個人を社会における役割体系に位置づけることでもある。

人間と社会との関係を基盤とし、そこにガイダンスを位置づける時、ガイダンスにおける認知論的および人間関係論的視座が見い出される。それは、社会自体は人間関係を通して形成されること、および人間は人間関係を通して人格形成が可能となるということを基礎とする。これらを基礎にしたガイダンスが行われなければならないといえる。

また、ガイダンスは直接的、間接的に人間関係を通して行われることを事実とする。そのガイダンスは、個人の人格を基礎として行われるのであり、その上で個人の行動や進路の決定等を対象とする。その場合に、ガイダンスが基礎とする人格は、具体的には各人格において独自に示される認知家庭として捉えられる。認知は、各人格を特徴づけるものであり、それは個人の認識、行動、あるいは生活全般にかかわり、それは当然、個人の進路決定にも大きな影響を及ぼすのである。

また、認知は、ガイダンスが基礎的事実とする人間関係のあり方をも規定する。それはカウンセラーとクライアント（client：来談者）における対人認知においても見い出される。反対に認知は、人間関係を通して形成される。認知は、個人の独自の人格を基礎とするとともに、社会との相互作用の過程を通して形造られるからである。それは、個人の独自で個性的な人格形成とともに、社会化を通して実現される人格形成を基礎とするものである。

このような意味において、ガイダンスにおける認知論的および人間関係論的視座の重要性が見い出される。

## 第一節 ガイダンスにおける基礎的認識

ガイダンスの概念は、社会的背景のもとに展開されてきたということができる。このことは、ガイダンスの内容が社会と密接な関係にあることを示唆するものであるともいえる。それは、例えばガイダンスが生活指導と捉えられる場合も、また職業指導として捉えられる場合も同様である。前者は、生活教育として広義に捉えられる時に、より端的に示される。また、教育が望ましい人格の形成を目的とすることはいうまでもない。そこで目的とされる人格は、現実社会に生活し、理想的な社会人としての人格の形成が望まれる存在である。この意味においても、社会との密接な関係が見い出される。

後者における職業指導としてガイダンスが捉えられる時、社会との関係はより密接である。産業社会（industrial society）といわれる現代にあっては、より一層顕著である。それは、序において既に指摘したように、社会自体の存続、進歩発展の上から見い出される。反対に、このような社会に生活する所属成員の適応の観点からも捉えられる。

また、人間が就業したり、社会生活を営み自己が所属する社会の存続や進歩発展に寄与した

りすることは、そのことを通して、個人の社会的位置づけが獲得されることを示す。言い換えるならば、それは、個人が社会における役割を担い、その体系に位置づけられた個人が、職業や生活において自己の役割を十分に果たすことによって、社会が維持、発展されるといえる。従って、その役割に応じた性能、資質を備えた個人がそれぞれの役割に位置づけられなければならないことになるのである。

そのため、人間と社会とのかかわりについて、役割およびそれに対する適応の観点から捉えるならば、そこでは、それぞれの役割に対してより効果的な適応を実現することのできる個人を配置することが問題となる。そこではガイダンスは、個人の能力、技能等と適応の対象が持つ特性の両者によってもたらされる要因のもとに進められる。それは、役割体系およびその役割を効果的に果す上で必要な適応体系を中心として進められるガイダンスであるといえる。

ガイダンスは、確かにこれらの観点から捉えられなければならない側面を持つといえる。なぜならば、ガイダンスは、個人の生活や活動がそれぞれの人格的特性に応じて効果的に実現されることを援助するものであるからである。それと同時に、ガイダンスは、個人によって志向される対象自体が効率的に実現されることを目指すものであるという意味をも持つものであるからである。これらの点から、ガイダンスはこれら両者が調和的に実現されることによって、個人の能力、適性が十分に発揮され、活用されるとともに、その個人とのかかわりを有する対象および個人と対象の両者を取巻く社会の維持・発展がはかられることを援助するものであるといえる。

更にガイダンスにおいては、人間自身が対象とされる。適応についての観点自体も、人間自身を対象とするものであるが、それ以上により積極的に人間自身が対象とされる。それは、人間自身の自己実現 (self-actualize) を援助するところに見い出される。ガイダンスは、人間における望ましい人格の実現を追求して行われる。それは、個としての存在における望ましい人格の実現であるとともに、社会的存在としての人間における望ましい人格の実現として捉えることができる。これら両者を基盤として、社会的、価値的、倫理・道徳的観点等から望ましい人格の実現が追求される。これは、ガイダンスが教育活動として進められるところに端的に見ることができる。そこでは、自己実現は、望ましい人格の実現として捉えられる。ガイダンスは、その過程を援助する活動であるといえることができる。

更に自己実現は、その主体である個人の欲求体系のもとに捉えられる。人間は、それぞれに欲求 (needs) を持った存在である。その欲求は、基本的欲求 (primary needs) としての生理的欲求 (physiological needs)、二次的欲求 (secondary needs) としての社会的欲求 (social needs) にまでわたる広範な内容を持つものである。<sup>(1)</sup> これらの欲求が、それぞれの生活場面において生起された時、自己実現はそれらの欲求の実現として捉えられるといえる。この意味において、ガイダンスは、これらの欲求の実現全体にわたって行われるものであることになる。

しかしながら、ガイダンス自体は、人間を社会とのかかわりのもとに自己の独自な存在を実現するという点に、その本来のあり方を見い出す。そのため、自己実現は、それぞれの人格における欲求の実現として捉えられながらも、ガイダンスにおいては、自己の欲求を社会との調

和のもとに実現するところにその意義が見い出される。また、教育に位置づけて行われるガイダンスが示すように、望ましい社会生活の実現を達成することのできる自己実現として捉えられる。そこでは、具体的には自己実現に対する価値的、論理・道徳的視点などが見い出される。

従って、ここで示される欲求体系は、先に指摘した望ましい人格の実現として捉えられる自己実現過程と一体的に認識されるものであるといえる。このことによって、ガイダンスは、それぞれの人格を主体として、社会との調和のもとに、自己の独自の欲求に基づく自己実現を援助するものであることになる。それは、人間自身を直接の対象とするガイダンスを示すものである。

これまでに、ガイダンスの概念を人間と社会とのかかわりを中心として捉えてきた。そこでは、ガイダンスは、適応体系、役割体系、自己実現過程（欲求体系）のもとに認識されることが示された。それらは、換言するならば、個としての人間および社会的存在としての人間を基礎的認識として示されるものであることが指摘された。

これらのことは、人間観の変遷を見ても端的に示される。とりわけ、人間の行動についての認識を通して得られる人間観において見い出される。また、人間観を捉えることは、先に示されたガイダンスにおける諸側面に加えて、更に一つの側面を闡明化させる。同時にそれは、これまでに示してきた諸側面が実際にガイダンスを通して実現される際の人格的基礎をなすものでもある。

人間観を認識することの意義として、それは、「人間の一樣性と多様性の範囲及びその機能を、正確に発見し、全体的かつ統一的な人間観を確立することが、よりよく生きる生きること、すなわち人間らしくそして自分らしく生きることの基礎条件である<sup>(2)</sup>。」という点が見い出される。このような観点からの認識は、人間を対象とするガイダンスにおいても意義深いものと考えられる。

ガイダンスを捉える上で効果的な示唆をもたらす人間観は、人間を認知論(cognitive theory)的視点のもとに認識するものである。それは、人間を、人格を基盤とした行動を通して捉える。この場合に意味される行動は、直接に視覚や聴覚などの感覚を通して捉えられるものだけではない。それは、人間における身体的・物理的活動ばかりでなく、生理的・神経的活動や精神的・価値的活動にまでわたる広義の行動を意味するものである。そして人格は、その主体である個人を具体的に形造るものであり、そこにそれぞれに応じた独自の統一的な傾向をあらわすものとして認識される。

認知論自体は、行動について示されてきた一連の認識に位置づけて捉えることができる。その捉え方には様々の観点があるが、ここでは次のような一連の体系のもとに認識する。それは、刺激(S ; stimulus) — 反応(R ; Response) 系列のもとに捉えられた行動認識<sup>(3)</sup>、それらの媒介変数として有機体(O ; Organization) を位置づけて捉えられS—O—R系列のもとに認識された行動、行動(B ; Behavior) を人格(P ; Personality) と環境(E ; Environment) との関数として捉え、 $B = f(P \cdot E)$ <sup>(4)</sup> の図式によって示された行動認識の体系として見ることができる。ここで示される環境とは、人間の生活空間(life space)を形造るものであり、ゲシュ

タルト心理学 (Gestalt Psychologie)<sup>(5)</sup> の観点から捉えられるものである。

ここで示した一連の体系は、行動についての認識を通して、人間自身が次第に個性的に、また環境との相互的關係の観点から捉えられてきていることをあらわしている。このような一連の体系に続いて認知論的視点が位置づけられる。認知論的視点においては、人間は個としての独自の存在を実現するとともに、社会的存在を実現するものとして捉えられる。人格は、それらによって実現される全体性のもとに捉えられる。また、人間は人格に応じて実現される対象とのかかわりのもとに捉えられる。ここで示す対象とは、人間が、明確に意識していると、していないとにかかわらず、それとの相互的な心理的・力動的関係を形成し、そのことによってその個人の行動（先に示した広義の意）が影響される特性を持つものである。それは、物的とは限らず、心理的意味を持つものも含むものである。人間についての認知論的視点は、人格を基礎として示される対象との関係についての認識を通してあらわされる。その関係は、主体である人格を反映し、それに応じて示されるものであるために、その関係についての認識を通して、主体である人格自体も捉えられる。

また対象について示される自己との関係認識は、対象および自己についての認識を示すものであることはいうまでもないが、同時にそこで捉えられた認識を基礎にした行動が生起されることをあらわす。逆に言うならば、行動はそこでの各人における認知によって特徴づけられながら生起されるということができる。

更に、そこで生起された行動場面は、その個人にとって新たな心理的場面をもたらすことになる。それは、同時にこのことによって、その心理的場面に応じた認知が示されることを意味する。これは、認知変容を示すものであるが、認知が変容されるならば、当然その後続く行動が変容されることになる。両者はこのような相互的な連続関係にある。そのため、望ましい行動の生起が期待される場合においては、それぞれの人格に独自の認知を変容させることが問題となってくるということができる。

認知によって特徴づけられながら生起される行動は、その端的な例を示すならば、接近 (approach) と回避 (avoidance) としてあらわされる。両者の選択は、認知のあり方によって決定されるが、その主体である人格および人格を取巻く心理的場に依存する。それは、様々に選択され、決定されるが、その基本としては既に指摘してきた欲求あるいは自己実現を可能にする方向に示されると考えることができる。もちろん、この場合における欲求および自己実現は、広義の意によるものである。また、個人的および社会的状況に応じて示されるものである。そのため、時には適応として示されることもあり、あるいは役割の実現として示されることもある。そこでは、それらに応じた行動が実現される。また、そこで生起された行動に応じた認知が実現される。しかも、その認知が体制化 (organize) されるならば、そこには人格自体および人格を基盤として示される態度 (attitude) の変容が示される。これは、人格形成および態度の実現をもあらわす。

このような観点から捉えられる認知論的視点は、ガイダンスにとって、きわめて重要な意義を持つ。ガイダンスは、生活適応や進学、就職のためだけに行なわれるものではない。また、

それらに関する問題が生じた時においてのみ行なわれるものではない。

ガイダンスは、これらの問題が生じた時に、それを主体的に解決していくことのできる能力の育成を目的とする。また、それらを積極的に自己の生涯計画 (life-plan) に取り込みながら、社会との調和のもとに自己の独自の存在を実現していくことのできる能力の育成を目指す。更に、このような能力を備えた人格の形成を目標とする。それは、生活指導においても、また学習指導においても指摘することができる。ガイダンスにおけるキャリア (career) についての概念は、このことをより端的に示すものであるということ(6)を指摘できる。

ガイダンスは、このような基礎的認識のもとに進められる。このように捉えられるガイダンスが実際に進められる場合、それを認知論的観点から指摘するならば、個人と対象とのかかわりを、より望ましいあり方として実現することができるよう援助することを通して進められることになる。そして、そこで得られた認知を基礎にして、その対象に対する接近および回避の行動が実現できるように援助するところにガイダンスが示される。そこではガイダンスは、より促進的に進められる場合と、むしろ反対に対象に対する行動が抑制的に行なわれる場合の二種類が見られることになる。それは、ガイダンスは、望ましい行動実現に対する積極的・前進的な援助とともに、非行化を防止する場合のように、むしろ対象との関係を断ち切ったり、あるいは改善したりすることを援助することを通して進められる場合があることによるからであるといわねばならない。この意味においても、ガイダンスにおいては、その接近行動がより望まれる場合と、むしろ反対に回避行動として実現される場合があることがわかる。換言するならば、このような意味において、ガイダンスは、接近—回避の行動を統御しながら、個人におけるより望ましい人格形成を援助する活動であるということができる。

なぜならば、接近—回避を通してより望ましい行動における相互的連続性において指摘したように、そのことによってより望ましい認知変容が実現され、このことは行動の改善をもたらすとともに、それが体制化されることによって、より望ましい人格の形成が実現されるからである。すなわち、これまでに示してきた一連の過程は、人間において、社会あるいは生活環境との相互的關係のもとに実現される人格形成の過程をあらわす。ガイダンスは、この過程を援助する活動として捉えられる。

ところで、これまでに指摘してきた認知は、それぞれの人格に応じた独自の形態を持つものである。それは、それぞれの人格特性を反映するものであり、きわめて個性的に捉えられる。同時に、それは社会とのかかわりのもとに捉えられる。それは、認知自体が個人と対象との関係のもとに捉えられることによる。また、個人における独自の認知形態の形成は、個人と社会との相互關係を通して実現されることに依る。

これまで指摘してきたように、認知は、ガイダンスにおける基礎概念として位置づけられる。それは、人格に応じて捉えられるとともに、社会との緊密な関係のもとに捉えられる。

## 第二節 人間関係における認知の位置づけ

ガイダンスの主体は、人間である。ガイダンスは、人間に対する人間による援助の関係として展開される。この主体としての人間は、環境との力動的な相互作用を実現しながら生活している。それは、環境に対する働きかけであると同時に、反対に環境から働きかけられる関係として示される。この場合における環境とは、既に単に静的、物理的にのみ存在するものではない。それは、力動的に存在するものであるが、同時にそこに存在する個人にとって、その個人の生活に対して何らかの影響作用を持ち、生活にかかわる意味を持った対象として捉えられるものである。

人間を取巻く環境には様々のものがあるが、それらのすべてが人間の生活にかかわるものであるとは限らない。人間の生活に直接、間接にかかわる環境は、限られたものである。対象として捉えられる環境において、人間の生活とかかわる意味が見い出されないならば、それは、心理的・力動的意味における環境であるということとはできない。このことは、人的・社会的環境についても指摘できる。

前節において、ガイダンスの基礎概念としての認識は、社会との緊密な関係のもとに示されることを指摘してきた。この認識によって捉えられる社会とは、先に示した心理的・力動的意味における環境であり、個人にとって、自己の生活に直接、間接にかかわる何らかの意味が見い出される対象として捉えられるものである。すなわち、認知と緊密な関係を有する社会とは、個人と心理的・力動的関係を有するものであり、また、個人の生活や行動を変容させることのできる意味を持つものであり、この意味において人格形成に対しても影響を及ぼすものである。

このような観点から捉えられる社会を、ガイダンスとのかかわりのもとに具体的にあらわすのは人間関係である。認知論的視点のもとにガイダンスと人間関係を捉えるならば、人間関係は、まず第一にガイダンス関係を形成するといえる。このことは、本節の冒頭で指摘した。

また、人間関係は、認知を発達させるといえる。これは、人格形成とも密接な関係を有する。人格形成は、個としての人格と同時に社会的存在としての人格が調和的に実現されるところにあらわされる。それは、他者から孤立して実現されるものではなく、自己以外の人々との相互交渉を通して実現される。人間関係は、このような関係を具体的に実現するものである。

このようにして実現される人格形成を通して認知的発達もたらされる。従って、この意味においても、認知は人間関係と緊密な関係を有するということが指定できるのである。

また、認知は人格に応じて示されるものである。認知は、それぞれの人格において特徴的に見られる独自の認知スタイル(cognitive style)<sup>(7)</sup>を持つ。そこでは、人格的特徴の反映を見い出すことができる。このような人格の形成および認知スタイルの実現は、人々との相互作用によってもたらされる学習を通して達成される。ここで示す学習とは、いわゆる社会的学習(social learning)を含む広義の意味によるものである。

この学習を可能にするのが、人間関係である。このことによって個人は、それぞれに行動規範を獲得したり、また自己を取巻く対象についての意識や態度等を培う。これらは、認知に対



しても大きな影響を及ぼす。認知スタイルは、それぞれの人格におけるこれら様々な要因間において形成される心理的・力動的関係のあり方に規定される。それは、それぞれの人格における独自の認知スタイルとして実現される。

認知と人間関係は、人格を基盤にしたこのような関係にあるが、それが両者による相互の関係であることはいうまでもない。すなわち、これまで指摘してきたように、認知は、人間関係を通して変容される。これとは反対に、人間関係のあり方は認知に依存する。それは、その関係における所属成員相互による対人認知においても見い出される。人間関係は、各成員相互による対人認知に応じて実現されるのである。また人間関係は、成員によって認知される集団としての雰囲気 (Atmosphäre) や士気 (morale), 各人における役割認知, 各成員相互における心理的・力動的関係についての認知等に応じた特徴を持ちながら実現される。

このようにして実現された人間関係は、次に来るべき認知の変容を促す。なぜならば、それまでの認知は、それを基礎として実現された新たな行動や状況に影響されながら、時には修正され、また時にはより強化されるなどの変容を受ける。これは、新たな認知の実現を示すものである。従って、認知と人間関係は、両者による相互的关系を通して、連続的な相互変容を示すといえることができる。また、換言するならば、人間関係自体も人間における一つの行動形態として見る事ができるが、認知と行動とについていうならば、先行する認知は、行動を通して、来るべき認知の基礎として位置づけられるといえることができる。しかも、それは、人格を基盤とし、人格特性に応じて実現されるのである。

このことは、観点をかえて見るならば、このようにして行動に応じた認知の変容が実現されるということとは、このことによって新たな行動や自己を取巻く状況に適応することが可能になることを示すことになる。すなわち、換言するならば、認知変容の実現は、適応の可能性を示すものであるといえる。それは、認知を軸とした態度変容として捉えることもできる。また、根本的には、人格の変容として認知することもできる。

これまで指摘してきたことから、認知と人間関係との関係は、次のような点に見い出される。

- (1)認知は、人間関係の主体である人格 (personality) を基盤とし、それに依拠して示される。
- (2)認知は、人間関係のあり方を規定する。
- (3)認知は、人間関係と相互連続性を有する。
- (4)認知は、人間関係を通して人格形成を規定する。

認知と人間関係における両者の関係における主要な特性は以上の点に見い出されるが、(1)から(4)にわたる要点は、それぞれが個々に両者の関係において見い出される独自の特性を示すものであると同時に、それらは、人格形成を基軸とした一連の過程を示すものでもある。すなわち、これらは個々の項目が並列的に存在するものではなく、全体として一連の過程を示すものである。

これらの一連の過程における基礎的認知は、両者の相互的关系を通して、その主体として位置づけられる個人の人格形成が実現される点に見い出される。最初に指摘した、認知と人格との関係は、認知スタイルあるいは認知パターン (cognitive pattern) に関係するものである。

各個人において、それぞれに独自の認知過程が見い出される。それは、対象に対する各人に固有な関係認識として捉えられる。具体的には、その主体である個人において比較的に一般化 (generalization) された定型的な反応様式としてあらわされる。しかしながら、それは絶対的に固定化されたものであるとは言い切れない。それは、可塑性を含みながら示される一般化された反応様式である。

このような認知は既に指摘したように、人格を基盤として示される。またその主体である人格特性に応じた反応様式としてあらわされる。人格自体は、その独自性ととも、社会との相互性のもとに示されるが、その社会との相互関係を認識するのはやはり認知を通して行われる。それは、個人を取巻く社会自体が対象として位置づけられるからである。従って、社会に対する反応様式は、その人格に固有な認知スタイルを通して示されることになる。このような認知過程を通して実現される社会との相互交渉において、社会的学習や態度あるいは意識の変容などが実現されるならば、そこに新たな人格の形成が示されることになる。

二番目に指摘したことは、人間関係のあり方は、認知に規定されるということについてである。これは、人間関係は、そこに所属する個人にとってそれ自体が自己を取巻く対象として存在することに依る。また、人間関係は、個人にとってそれ自体が一つの行動として示されるものであり、また自己の存在のあり方として示されるものであることに依る。認知は、これらの点において人間関係を規定する。

個人にとって、人間関係が対象として位置づけられるのは、二重の意味においてである。まず第一に、個人は人間関係を形成するそれぞれの成員を認知する。それは、相互的な対人認識として示される。また第二に、個人は、人間関係全体を認知する。人間関係全体が認知の対象として位置づけられる。このことによって関係内における全体的な心理的・力動的関係や集団としての雰囲気等が捉えられる。同時に、全体に対する認知を通して、自己の役割や自己のあり方等が認知される。この意味においては、それは自己認知を含むものであるといえる。

このようにして捉えられた人間関係は、その主体である人格に独自の反応様式として認知されたものである。そして人間の行動は、自己の認知を基盤として生起されるものである。行動は、それぞれの人格における認知に基づいて生起される。各人の行動は、それぞれの人格に特有な認知スタイルによって、主体的・選択的に決定される。そのために、同一の状況や場面が経験されたとしても、それぞれの人格に応じて様々な行動が生起されることになる。人間関係も同様である。人間関係に所属する成員の認知は、それぞれに異なるものである。そのために、そこにおける行動あるいは関係のあり方は、各人の人格に特徴づけられながら様々に示される。

三番目に指摘した、認知と人間関係の相互連続性における一方は、二番目に指摘した人間関係のあり方は認知に規定されるところに見い出される。これとは反対に、認知は人間関係に規定されるところに他方が見い出される。認知は、人格に基づいて示されるものであるが、それと同時に、その対象あるいは個人を取巻く状況に影響される。それは、集団心 (group mind) や準拠枠 (frame of reference) とのかかわりのもとに見い出される。前者についていうならば、集団 (人間関係) においては、そこに独自の心理的状況を見い出すことができる。それは、

集団が持つ雰囲気や気分として、その成員の心理状態に影響を及ぼす。認知も同様に、これらの要因に影響される。また集団における行動や意識、同様に人間関係におけるそれらのものは、そこに所属する個々人にとって、行動規範として一つの準拠枠の役割を果す。これらのことは、当然認知のあり方にも影響を及ぼす。認知は、これらに規定されながら実現される。

また、このようにして実現された認知が、次に続く人間関係のあり方を規定することはいうまでもない。従って、認知は人間関係をそれに応じて特徴づけながら実現する。更にそのことによって実現された人間関係は、人間関係を通して示される認知を規定するという一連の過程を見い出すことができる。これまで指摘してきたことからわかるように、認知と人間関係の両者は、それぞれが相互に特徴づけられながら、連続的に実現されるということができる。

最後に、既に認知は人格に応じて実現されることを指摘してきた。ここにおいては、認知は人格形成のあり方を規定するということが示される。人格形成を取巻く状況は様々である。その状況や要因は、多種多様である。またそれらは、決して恒常的ではない。様々に変化を続けるものである。そのために、人格が維持されるためには、それらに応じた変容が実現されなければならない。このことは、適応的観点からも、また発達の観点からも指摘できる。

このような意味において、個人においては社会や発達過程等に応じた人格形成が実現されなければならないということが指摘できる。またそれと同時に、そのためには、それらに応じた人格形成が促されなければならないことを指摘することができる。すなわち、人格形成に対する方向づけやその望ましいあり方を追求する実現傾向が示されなければならない。

人格形成に対して、このような機能を有するのが認知である。認知は、自己を取巻く状況や自己自身を対象として捉える。<sup>(8)</sup>それらの対象についての認知は、その時々の実態について示されるとともに、それらを基盤として捉えられる将来的な展望が同時に見い出される。すなわちそれは、自己自身についていうならば、まず第一に現状についての認識が得られる。このことと同時に、現状を基盤とし、その上で期待される将来的展望が示される。これは、自己自身における望ましいあり方を認知するものであり、自己実現傾向の基礎となるものである。すなわち、自己実現傾向が、そこでの認知を基盤として示されることになる。

この自己実現傾向は、人格形成のあり方を規定するものである。人格形成は、ここで示される実現傾向に応じて達成されるということができる。従って、このような意味において、認知は、人格形成を規定するということができる。

また、この人格形成は、その主体である人格が個としての独自の存在とともに、同時に社会的な存在を実現するものであり、それは具体的には人間関係を通して実現されるものであるために、その望ましいあり方の実現にとって人間関係は、きわめて重要となる。人格形成は、人と人との相互交渉を通して実現されることによって、社会との調和を達成した個性的な人格の実現として示されることが可能になる。

更に、このようにして実現された人格は、認知の基盤として、その独自のあり方を特徴づけるものであることは既に指摘してきたところである。そのために、認知は、それに先行する人格を基盤とすると同時に、それに続く人格形成を特徴づけるといえる。また、両者のこのよう

な一連の過程を可能にするのが人間関係である。

### 第三節 ガイダンスと人格形成

人間関係と認知は、人格形成を実現する上できわめて重要な役割を果たすことをこれまでに指摘してきた。そこでは、人間関係と認知は相互一体的に人格形成を実現することが示された。両者と人格形成との直接的な過程を見るならば、人格形成は人間関係を通して実現されるとともに、人間関係はその実現過程を特徴づける認知を規定することがわかる。そのために、人間関係の観点からいうならば、人格形成は、人間関係において示される認知によって規定されるということが出来る。このような意味において、人格形成は人間関係に応じて実現されるといえる。従って、人格形成にとって、人間関係はきわめて重要な意義を持つといえる。

人格形成に対して人間関係が果たすこのような役割を認識する時、このことはガイダンスにとっても重要な意味をもたらす。なぜならば、ガイダンスは人間関係を中心として展開されるものであるからである。

ガイダンスは、狭義には個人における問題解決能力の育成として展開される。問題解決能力は、教科を中心とした学習において生ずる問題に限られたものではない。個人が自己の生活において経験する様々な問題が含まれる。ガイダンスは、これらの様々な問題に対して自己自身の能力によって対処し、それを解決することを通して、より望ましい生活の実現を達成する上で必要とされる能力の育成を目指すものである。ガイダンスは、個人が問題に直面した時に、そのより望ましい解決の実現を可能とするために与えられる直接的な援助としても示される。また、個人がみずから自己の能力を高めていく過程においても示される。それと同様に、各個人が自己の能力を高めることによって、より望ましい生活を実現する過程に対しても与えられるのである。

また認知論的観点からいうならば、既に指摘したように、ガイダンスは、個人が対象に対して示す接近—回避の行動を指導し、統御することによって、個人におけるより望ましい生活の実現を援助する。個人は、自己の認知スタイルに応じて様々な対象に対して接近および回避の行動を生起させる。それは興味や欲求の対象およびそれを充足させるための行動として示される。これらの行動においては教育的に好ましくないものも当然含まれる。それらの様々な行動を指導することを通して行動が統御されなければならない。そのことによって、個人にとって望ましい行動が生起され、理想的な生活が実現されなければならない。ガイダンスは、このような活動を通して個人の自己実現や生活の実現を援助する。

またこのようにして示されるガイダンスにおいては、根本的には個人における単なる技能や能力の向上を援助することに留まらない特性を見い出すことができる。もちろん、このような観点もガイダンスにおいては大切なことであるが、それと同時に、これらの主体である人格自体の望ましい実現が追求されることになる。技能や能力自体の観点から見ても、それらが十分効果的に活用され、自己にとって望ましい生活の実現をもたらすことができるためには、それら自体がその主体である人格を基盤として、それぞれの人格における独自性に応じて示されることが必要である。

同様に、ガイダンスは技能や能力等として示される個人的資質を単なる労働者所要特質としてのみ捉え、それらが活用される機会を提供することだけに留まるものではない。もちろん、それらの資質を通して個人の職業適応がはかられることが必要であるが、そればかりではなく、ガイダンスは、それらによってその個人の人格形成が実現されることを目的とするものでなければならない。そのことによって個人の特性が最大限に発揮されるような生活の実現として援助されなければならない。すなわち、そこにおいて「自己の可能性の増大」が示され、「新しい創造的な人生を送り得る人間の育成」<sup>(9)</sup>が、ガイダンスにおける主要な課題として位置づけられなければならないということができる。

これまで指摘してきたことからわかるように、ガイダンスは人格形成の援助を主要な課題として展開される。問題解決能力においても同様である。また、技術や知識の習得も同様である。これらは、単なる技術や知識、能力の獲得に終始するのではなく、人格形成を基礎として実現されなければならない。そのような意味においてガイダンスは、人格形成あるいは先に示したような人間の育成を援助することを通して展開されるということができる。

ところで、ガイダンスにおけるこのような基礎的認識は、キャリア(career)の概念において端的に見い出される。キャリアは、単に職業生活そのものや職業経歴を示すものではない。キャリアは、もともとは職業生活および職業生活を実現し、更にそれを変更する上で経験されてきた一連の過程をあらわすものとして捉えられる。もちろんこのような意味をキャリアの概念は含むのであるが、更にそこにおいては、人格的概念を見い出すことができる。その主要な概念は、二重の意味において見い出される。

一つは、キャリア自体は、人格を基盤とするという認識に見い出される。イサークソン(Lee E. Issacson)は、キャリアは人格的要因と緊密な関係を有することを指摘している。<sup>(10)</sup>また、ホランド(John L. Holland)は、職業選択について、「職業選択は、一つの人格的表出である。」<sup>(11)</sup>(The choice of a vocation is an expression of personality.)と、明確に指摘している。ここでは、職業選択には、その主体である人格が反映されることが明確に示されている。更に、キャリアと人格について、それを発達の観点から捉えるのは、サロモン(Paul R. Salomone)とパーマー(Christine J. Palmer)である。両者は、キャリアは人格的発達に応じて変容されることを示唆している。<sup>(12)</sup>このような、キャリアおよびその主体である人格の両者を発達の観点から捉えるところに、第二の人格的概念を見い出すことができる。

更に、キャリアにおいて見い出される特徴的な概念は、キャリアは、その主体である人格の生活を実現し、それを具体的にあらわすものであるという点である。しかも、それは人生の特定の期間においてだけでなく、全生涯にわたるものであることが指摘されている。もちろん、それが各人の人格に応じた独自の生活の実現であることは、改めていうまでもないのである。

キャリアについてのこのような認識は、先に示したイサークソンやサロモンおよびパーマーにおいても見い出される。更に、これまでに示してきたキャリアについての概念とともに、キャリアは個人における生活実現であることを指摘し、キャリア教育(Career Education)を両者の観点から捉えるのは、ホイット(Kenneth B. Hoyt)である。

ホイトは、キャリア教育は、職業生活について学習したり、また職業生活を実現するための準備を通して得られる経験の全体を指すものであることを指摘する。そこにおいて、職業生活自体は、個人のライフスタイル (life style) を実現するものとして捉えられる。しかもそれは、全体的なライフ・サイクルにわたるものである<sup>(13)</sup>。従って、このような意味において、キャリア教育とは、個人において実現される職業および生活の両者にかかわるものであるということを経験することができる。

また、キャリアの概念における特徴は、それが連続的に捉えられることである。それは、特定のキャリアが継続的に示されるということであらわすものではない。むしろそれは、力動的な連続性として示される。すなわち、人格を主体として実現されたキャリアは、ある特定の状態がそのまま保持され続けるというよりも、先行するキャリアを基盤とし、それに応じた次のキャリアが実現される。換言するならば、個人のキャリアは、それに先行するキャリアを基盤として実現される。またこのようにして実現されたキャリアは、次に来るべきキャリアの基盤として位置づけられる。キャリアは、このような連続性のもとに実現される。

キャリアについての認識は、職業指導についてだけの認識の変化を示すものではないといえる。キャリアについての認識は、生活指導や学習指導についても、きわめて有意義な示唆を多く含むのである。

これまで指摘してきたように、ガイダンスは人格形成を中心として展開される。その主体となる人格は、各個人における認知によって特徴づけられるものである。それは、個人における態度、意識、自己実現傾向等に反映される。これらの要因によって、ガイダンスの主体である人格のあり方が規定される。また、人格形成自体のあり方が規定されることになる。

従って、ガイダンスが人格形成を基盤とし、個人におけるより望ましい生活の実現を追求する過程に対する援助として捉えられるならば、これらの実現過程を特徴づける認知のあり方が、ガイダンスにおける主要な問題として位置づけられることになる。それは、ガイダンスがより効果的に展開される上でも重要なこととなる。同時に、ガイダンスにおいては、個人における認知形成が、ガイダンスを通して積極的に進められることが重要なこととなる。

学習指導を中心としたガイダンスがこのような観点から進められる上で多くの有益な示唆をもたらすのは、ピアジェ (Jean Piaget) およびブルーナー (Jerome S. Bruner) が示す所説である。ピアジェは、個人においては、各人に特有な認識過程が見い出され、それは発達段階に応じて示されることを指摘している。また、各発達段階における認識が十分に達成されることが、その後における認識が生起される上で必要なことが指摘されている。更に、各段階における認識は、それに先行する認識を基礎とするとともに、そこで達成された認識は、次に来るべき認識の基礎として位置づけられることを示している<sup>(14)</sup>。このような観点からピアジェは、認識における連続性を指摘するとともに、認識はその主体である各人格に特有なパターン (pattern) を持ちながらあらわされることを論及している。そこでは、人格的視点を見い出すことができる。

ブルーナーも同様に、各人においてはそれぞれに固有な認識が見られることを指摘している。

各人の学習は、そのような認知に依存することが示されている。そのため、学習が効果的に進められるためには、それぞれの認知に応じて示さなければならないことになる。更に、学習は、知識の獲得を中心とする以上に、各個人がみずから知識を生み出すことが可能となるための能力を育成することが追求されなければならないことが示されている。それは、このような能力を各個人の認知パターンとして体制化 (organize) した人格を基盤とした態度 (learning set) の育成として捉えられる<sup>(14)</sup>。このことは、学習過程自体が各個人の認知に応じて体系化されることの必要性を指摘するとともに、同時にそのような態度の実現を達成する上で必要な人格的基盤が存在しなければならないことを示唆し、その形成の必要性を指摘するものであるといえる。

ピアジェおよびブルナーは、学習的観点から認知と人格形成について論及するものである。そこでは、ガイダンスにおける学習指導的側面について有益な示唆が見い出されるが、同時に人格形成についての視点が見い出される。すなわち、人格形成のあり方を規定するものとして認知が位置づけられる。

これらの点から、学習指導の観点から見ても、ガイダンスにおける人格形成的視点が見い出される。また、その人格形成が効果的に進められる上で必要な認知形成が積極的に求められなければならないことがわかる。従って、ガイダンスは、各人の認知に応じて進められなければならないものであるが、同時にそれは認知自体の望ましい実現を軸として各個人の人格形成の実現を追求する過程として捉えられる。またこの人格形成は、各個人における主体的自己を中心として展開されるものであるために、この意味において、ガイダンスは自己実現過程に対する援助としての特性を持つということが出来る。

同様に、このような視点は職業指導としてのガイダンスにおいても見い出される。職業指導を認知的観点から捉えられていく上で、職業についての認知が具体的な心的総体として示されたものとしての職業意識を捉えることができる。個人についていうならば、職業意識には、希望職業と理想職業の両者についての意識を見ることが出来る。両者の特徴および相違は次のように示される。「希望職業は、自分を取りまく諸条件を考慮して、その上でその職業に就きたいと考える職業であるし、理想職業は、自分がそれに就くか就かないかを全く度外視して、自分の垂涎してやまない職業である。この意味に於いて彼の描く理想職業こそ、外附的な諸要素及び彼以外の環境的な諸条件を全部かなぐり捨てたところの、彼自身の中にある純粹の職業意識でもある。」<sup>(15)</sup>と、考えられる。

両者はこのようにそれぞれの特徴のもとに捉えられるが、それは、両者を取巻く外的な社会的・環境的要因にも依存するものであるが、同時にその主体である個人の観点からいうならば、両者の相違は、いわゆる認知的ずれ (cognitive gap) を示すものであるといえる。実際のガイダンスにおいては、理想職業を追求しながら両者についての意識ができ得るかぎり一致できるように個人を援助することが行なわれる。そのために、その過程においては、様々な職業意識の変遷が示される。

このような過程は、認知論的観点からいうならば、認知的ずれが解消され、それがその主体である個人が理想とする望ましい自己のあり方が実現されるように導びかれることをあらわ

す。すなわち、その過程は自己実現の過程であるといえる。そのために、「職業意識の変化の過程とは自己自身を実現していくための過程である。」<sup>(17)</sup>と、端的に指摘される。このような意味においてもガイダンスにおいては、自己実現の過程が見い出される。

ところで、職業指導を効果的に進める上で必要な概念として、これまでに指摘してきた認知概念についての注目が急速に高まってきている。このような動向は、特にアメリカ合衆国およびイギリスにおいて顕著である。それは、キャリア・ガイダンス (career guidance) を基盤として職業指導を捉えるところにも見い出される。

このことの象徴的な業績としては、アメリカ合衆国において1965年に開発された「職業辞典—第三版」(Dictionary of Occupational Titles—Third Edition) を見ることができる。これは、一般にはD. O. T.と略称される。1939年に初版が、続く第二版は1949年にそれぞれに刊行されている。特に第三版においては、職業自体をそこにかかわる労働者に必要とされる労働者所要特質 (Worker Traits) と労働者機能 (Worker Function) によって分類することが試みられている。そこでは、認知概念を見い出すことができると考えられる。

D. O. T.における特徴の一つは、職務分析および職業適性についての着目にある。D. O. T.を中心としたこのような動向に刺激されながら、日本でも「職業辞典」の編纂が進められた。それは、第I部<sup>(18)</sup>と第II部<sup>(19)</sup>から成り立つ。第I部は、職業分類表を中心としたものである。それに対して第II部は、職業名、職務名についての解説の役割を果たしている。前者は、大分類、中分類、中間分類、小分類、細分類、細細分類、代表名にわたって配列、整理されている。それらは、分類に応じた記号がつけられ、今日のコンピューター利用において見られるコード的な役割を果たしていると考えられる。後者は、代表名およびそこに含まれる職務名、職業名を五十音順に配列しながら、その上に解説を加えたものである。また、代表名については、簡潔な定義が与えられている。これは、戦後間もないころに着手されたものであるが、今日の職業指導に対して一つの指針を示したものであると考えられる。

わが国におけるこれらの編纂は、D.O.T.の第一版が出版されたことに刺激を受けてもいるが、これと関連して、当時の連合国軍総司令部経済科学局労働課人力班が、一般職業適性検査組合せ (General Aptitude Test Battery) と職務分析 (Job Analysis) についての実施研究を勧奨し、命じたことも、その見逃せない影響の一つである。このように、わが国の戦後の職業教育、職業指導においては連合国、中でもとりわけアメリカ合衆国の影響が色濃く見い出される。このことは、米国教育使節団が及ぼした影響の一つである<sup>(20)</sup>。その使節団の報告書においても、職業教育 (Vocational Education) についての指摘が見られる。

そこでは、民主主義社会を確立することが追求されなければならないことと同時に、「創造力と高貴な衝動とは、学者の占有物ではないし、従来も決してさうではなかった。」(Creativity and noble impulse are not, and never have been, the monopoly of the scholar.)<sup>(21)</sup>ことが指摘され、これらが基盤とならなければならないことが示されている。そのためには、職人 (artisans) や労務者 (workers) に注目が払われなければならないことが記されている。また「よく訓練された職員の下で、生徒に対し、各種の職業的経験をなさしめる」(There should be



furnishad a variety of vocational experiences, under well-trained staff members.)<sup>(22)</sup> べきであることの重要性が示されている。

教育使節団の報告には、職業指導の観点からその意を汲むべきものが見い出される。それは、理念的な側面に留まらず、制度的、行政的、方法論的側面にまでわたるものである。またD. O. T.に見られるような視点は、その後の職業指導の発展に大きく影響した。それは理論面、実際面にわたって見い出される。とりわけ、職務分析および個人の特性についての着目は、職業指導における認知論的視座に道を開くものであり、またコンピューターの活用にも大きく寄与するものである。

職業についてのこのような観点からの接近は、職業指導が効果的に行なわれる上で大きく貢献すると考えられる。またこのような視点は、コンピューター利用と無縁のものではない。このコンピューター利用の観点から、D. O. T.第三版が開発される際に基礎作業として実施された職務評定資料を分析することも試みられている。<sup>(23)</sup>

これらの一連の研究においても見られるように、認知概念は職業を捉える上で非常に重要な役割を果たしているといえることができる。このことは当然に、職業指導を中心としたガイダンスにおいても、等しく大きな比重を占めることを示唆する。人間が自己の生活を多く職業に依存し、そこにおいて自己を実現していること、および職業的発達を通して自己の独自な人格形成を実現していること等を考え合わせる時、そのことによって、ガイダンスにおける認知的視点の持つ意義がおのずと明らかになる。

これまでの論述を通してわかるように、ガイダンスは、個人における人格形成を援助することを主要な課題とする。ガイダンスにおけるこのような視座は、キャリア・ガイダンスの概念等に端的に示される。また、同様のことは、様々の教育活動を通して展開されるガイダンスにおいても見い出される。

ところで、既に指摘してきたように、人格形成についての援助が行なわれる際には、その主体として位置づけられる人格に特徴的な認知のあり方が重要となる。人格形成は、その主体の認知に依存する。それは、実現傾向、動機づけ、進路の決定等に見い出される。これらの観点から認知は、人格形成のあり方を規定する。ここに、人格形成の視座からガイダンスにおける認知の重要性が指摘される。

このように、ガイダンスは人格形成を主体として進められる。それは、認知によって特徴づけられながら展開されるといえることができる。このことは、これまでに指摘してきたように、二重の意味の意味を持つ。それは、認知は、人格における形成過程を目標づけるところに見い出される。他の一つは、認知はガイダンス過程を特徴づける機能を持つ点に見い出される。

前者は、人格形成に及ぼす認知的影響に見い出される。認知論的観点から人格形成を見るならば、人格形成は、個としての人格の観点および社会的存在としての人格の観点とのかかわりのもとに捉えられる。両者は、相互関係のもとに捉えられるが、それを具体的に把握する機能を果すのが認知である。その上で、認知を通して、人格形成自体が方向づけられることになる。

従って、人格形成は、認知を通して自己自身が捉えられるとともに、それは社会に位置づけ

て捉えられることを基盤とし、両者の相互的な心理的・力動的関係に応じて、その方向づけが示されるということができる。このような関係的基盤のもとに、人格形成における具体的な対象や目標が設定される。それと同時に、それらの対象や目標に対する実現傾向が実際に進められる上で必要な方法や方策が立てられることになる。もちろん、それらの方法や方策自体も、認知過程を通して設定される。

後者は、ガイダンスを通して示される人間関係や援助活動に対する認知にかかわるものである。ガイダンスは、個人が人格形成を実現していく過程に対する援助として示される。その援助は、様々な方法によって行われる。それらの援助活動は、認知論的観点から見れば、それぞれが認知対象としての意味を持つ。それは、三重の意味において示される。一つは、人格形成を実際に進めていく個人を主体として捉えられる認知対象である。他の一つは、ガイダンス活動を進めていく人間を主体として捉えられる認知対象である。残りの一つは、ガイダンスの内容に対して示される認知にかかわるものである。

ガイダンス過程においては、それを通して人格形成を進めていく個人において、様々な認知が示されることを見ることができる。それは、ガイダンスを通して示される援助活動が、それぞれの客体において認知を生起させ得る刺激対象としての意味を持つことに依る。そのために、それぞれの有意味な刺激対象に対して認知が示されることになる。

このような認知は、ガイダンス活動を行う教師や親、地域社会における指導者、先輩等々に対して示される。同時に、ガイダンスにおいて示されるその内容やそこで用いられる様々ないわゆる教材 (subject matter)、器具、ガイダンス過程にかかわる環境的要因等に対しても認知が示される。これらに対する認知は、人格形成の主体である個人において、自己と自己を取巻く対象についての関係認識をもたらす。そのことによって、自己は自己自身を認知するとともに、同時にそれらの認知を通して自己の人格形成が特徴づけられる。

認知は、ガイダンスにおける援助を実際に進めていく人間においても示される。それは、ガイダンスを通して人格形成を進めていく個人に対して示される認知である。それは、ガイダンスを受ける側としての個人を対象とした認知である。児童・生徒・学生ばかりでなく、就業している者、転職を考えている者、社会においてガイダンスを必要としているすべての者が、この認知対象である。

認知対象として位置づけられるこれらの者は、それぞれがすべて独自の状況のもとにある。そこで問題とされることも個々別々であり、また、生活環境も異なる。なによりもそれらの人々は、それぞれに独自で個性的な人格を実現している。従って、ガイダンスが、それぞれの個人に応じたガイダンスとして展開されるためには、各人における独自の要因を的確に把握し、適切に指導、助成が行われなければならない。そのために、ここでは対象に対する個性的な認知が大切である。

最後に示したガイダンスの内容に対する認知は、ガイダンスにかかわるすべての人々に的確に得られることが必要である。その内容は様々であり、時には具体的な職業についての情報であったり、あるいは求職についての助言であったり、またある時には、就業する上で必要とさ

れる技能の向上を目指すものであったりする。また、それは、職務分析によって得られた資料や、あるいはその職業を取巻く社会的・経済的要因として示されるいわゆる職業情報に向けられるものであったりする。

これらのことは、職業指導ばかりでなく、学習指導、生活指導、進路指導においても指摘できる。またこれらは、単にガイダンスを提供する側の者ばかりでなく、それを受ける側の人々においても、的確に捉えられなければならない。なぜならば、これらの要因によって、ガイダンス過程およびそこでの目標設定、またそこで実現される人格形成等が規定されるからである。

ガイダンスにおける認知的視座を具体的に示してきた。このような視座のもとにガイダンスを捉える時、そこには人間関係の重要性が見い出される。それは、そこでの中心的視座として位置づけられる認知は、人間関係を通して実現されることに依る。端的にいうならば、認知は人間関係を通して実現されるという特徴を持つからである。このことは、認知自体についての発達の視点と無縁ではない。その発達を可能にするものこそ人間関係であるといえる。とりわけ、人間としての人格形成は、人間が他者から孤立したところに実現されるものではなく、他の人間との相互的な交わりを通して実現されるということを基本とすることを認識するならば、このことは容易に領ける。認知は、その主体である個人における人格形成がこのようにして実現されることを基盤とし、また、認知自体も自己と社会との交わりの経験を通して実現されるものであるために、人間関係との緊密なかかわりのもとに捉えられる。従って、ガイダンスが認知的視座のもとに捉えられることによって、ガイダンスにおける人間関係の重要性がより一層認識される。

更に、ガイダンスにおける人間関係の重要性は、なによりもガイダンス自体が、直接的・間接的であれ、人間関係を通して進められるところに見い出される。ガイダンスは、人間が自己の能力を最大限に伸ばし、社会的との調和的な人格を形成し、真の人間として実現される上で必要な、人間による人間のための援助活動である。

#### 第四節 総括・結語

ガイダンスは、個人が現実生活において自己の独自な人格形成を実現するとともに、併せてそのことによって望ましい社会生活が実現されることを援助する活動である。このようなガイダンスは、これまでに指摘してきたように、認知論的視座のもとに捉えられる。また、同時に人間関係論的基礎を見い出すことができる。

認知論的視座のもとに捉えられることによって、ガイダンスにおいては次のような特性が見い出される。それらは、ガイダンスにおける主要な視点を人間自身に据えるものである。それと同時に、ガイダンスを教育の主要な機能として捉えるものである。

以下、順次列挙していくことにする。

その特性の一つは、連続性に見い出される。それは、認知が先行する認知を基盤とするとともに、それに続く認知の基盤として位置づけられることに依る。このために、認知の主体である人格自体の形成も連続的に捉えられる。このことは、ガイダンスにおける発達概念を惹き起

こすものである。また、ガイダンスは、決して人生における特定の時期に限られるものではないことを示す。そこには、全生涯 (life-long) 点視点が見い出される。

次に、ガイダンスは、人格形成を根本的機能として展開されることを示す。それは、ガイダンスは、技術の向上や技能の習得、進路の指導のみに留まらないことをあらわす。これらを自己の主体的な努力によってみずから追求することのできる人格の形成を目指す。あるいは自己の進路を積極的に開拓していくことのできる人格の形成を目指す。すなわち、これらについての実現傾向を自己の独自の認知スタイルとして体制化 (organize) した人格の形成を援助する活動として、ガイダンスが展開される。その場合、認知スタイルは、自己の独自の人格特性と自己を取巻く環境との心理的・力動的関係に依拠して規定される。

ガイダンスは、個人における独自の生活の実現を援助する活動として進められる。その生活は、それぞれの個人における人格特性に依拠して実現されるものである。同時にそれは、望ましい社会生活の実現として示される。なぜならば、人間としての望ましい存在は、個としての存在とともに社会的存在が調和的に実現されることによって実現されるからである。また、その主体における認知は、環境および社会と緊密な関係を有するものであるからである。

ガイダンスは、それにかかわる者の人格に依拠して個性的に展開される。それは、ガイダンスを受ける者およびそれを実施する者の相互において見い出される。このことは、各人の認知は、それぞれの人格を基盤とした独自性を持つことに依る。そのため、ガイダンスは、それぞれの個性に依拠して進められることになる。換言するならば、ガイダンスが適切に行われるためには、それぞれの認知に依拠して個性的に進められる必要がある。

ガイダンスは、個人と対象との関係の認識のもとに進められる。この場合の対象とは、ガイダンスにおいて設定される目標であったり、あるいは個人の生活や人格形成に影響を及ぼす要因などである。ガイダンスにおいては、個人はこのような対象との心理的・力動的関係のもとに捉えられる。そのため、個人についての個性的な理解とともに、対象についての的確な理解が求められる。

ガイダンスにおける認知論的視座は、ガイダンスにおけるコンピューターの活用を可能にする。職業指導においては、既にこのような視座のもとに多くのプログラムが作成されている。そこには、人間工学的視点も見い出される。現代社会にあつては、このような傾向は、将来においてもますます増大するものと思われる。

ガイダンスにおける人間関係論的基礎を認知とのかかわりのもとに捉えるならば、次の点を見い出すことができる。

ガイダンスは、人間関係を通して進められる。ガイダンスと人間関係とのかかわりは、ここに端的に示される。それは、対面的な人間関係によっても進められる。また、集団を通して進められることもある。あるいは、教材や文化財、具体的な事物を通して進められることもある。それは、日常の生活指導から、問題に直面した時、またその後の補導 (follow-up) にまでわたるものである。

ガイダンスにおける人間関係は、カウンセリング的に示されることもある。あるいは、リー

ダーシップ的に示されることもある。グループ・ダイナミックス的に示されることもある。これらの人間関係を通して個人は、自己自身を認知する。また、自己の社会的役割を認知する。このような基礎的認識のもとに、自己のあり方を方向づけていく。

人間関係は、認知を規定する。認知は、自己の独自の人格を基盤とするものであるが、それは社会との交わりのもとに形成されるものである。そこには、社会的・文化的影響が反映される。家族関係などに端的に見られるように、人間関係はそこにかかわる成員の人格に大きな影響を及ぼす。認知は人格を基盤にして示されるものであるために、このような意味においても、人間関係は認知を規定すると指摘することができる。

そればかりではなく、人間関係はそこに所属する成員にとって、行動の準拠枠や規範としての意味を持つ。このようなことは、いわゆるギャング・エイジ (gang age) にある子ども達においても見られる。またガイダンスにおいては、ガイダンスを行う教師や指導者などの言動や意識、価値観等々が、しばしば行動のための準拠枠として位置づけられる。これらは、その主体である人格における認知が、それらに応じて示されることをあらわす。あるいは、認知は、それらとの関係のもとに示されるものであるといえる。このような意味において、人間関係は、ガイダンスの基盤となる認知を規定するものであるということが出来る。

人間関係は、ガイダンスにおける根本機能である人格形成を実現する。これは、人間関係を通して、社会的学習が実現されることを示す。また、人格的観点からいうならば、このことによって社会化 (socialize) が実現されることをあらわす。もちろん、人間関係は人格形成に対する直接的な指導、援助の関係として実現されることもあるが、ここで示したような特性によっても、そこに所属するそれぞれの成員の人格形成を実現する機能を持つということが指摘できる。個人は、人間関係を通して人格形成を実現することによって、自己の個性とともに、社会性を培った人格として示されることが可能となる。このことによって、社会との調和的な人格が実現される。

これまで指摘してきたように、ガイダンスは、人間関係を中心にして捉えられる。それを可能にする基本的視座として認知概念を見い出すことができる。このようにして捉えられるガイダンスは、人間自身を主体とするものであり、その絶えざる成長・発達を追求するものである。

同時にそれは、各人格に応じた自己実現を追求する過程としてあらわされる。それは、言うまでもなく人格を基盤として示されるものでなければならない。またこの自己実現は、それぞれの人格における最高次のあり方の実現を追求するものでなければならない。それは、自己の利己的な欲求だけに支配されるものであったり、独善的な意識に基づくものであってはならない。ガイダンスは、このような自己実現の過程の指針を示し、またその望ましい実現を助成する。

ガイダンスは、人間としての成長・発達を援助する活動である。それは、人格形成および自己実現の過程に対する援助として示される。同時に、ガイダンスは各個人における社会的位置づけの実現を援助する。それは、職業指導だけに留まらない。生活指導や進路指導も同様である。

ガイダンスは、このような主要な機能のもとに展開される。そのために、ガイダンスに関係

する様々な人々、要因等について、個々のそれらのものについてはもちろんであるが、同時にそれぞれを取巻く全体的状況をも含んだ幅広い理解を得ておくことが肝要となる。これを可能にするのが、認知的視座である。また、このようにして展開されるガイダンスの基軸として位置づけられるのが人間関係である。

## 注

- (1) A. H. Maslow. Motivation 2nd Personality, and ed. 1970, Harper and Row, p.97ff
- (2) 小沢富夫, 廣田繁編, 「人間観の諸類型」, 昭和53年, 文化書房博文社, p.12
- (3) J. B. Watson, Behaviorism, 1967, The University of Chicago Press, p.22
- (4) K. Lewin, A Dynamic Theory of Personality, 1935, McGraw-Hill, p.79
- (5) F. Koffka, Principles of Gestalt Psychology, 1962, Routledge & Kegan Paul, p.24ff
- (6) J. A. O'donnell, D. G. Andersen, Factors Influencing Choice of Major and Career of Capable Women, The Vocational Guidance Quarterly, Vol. 26. No.3., 1978, The National Vocational Guidance Association, pp. 214 -221
- (7) S. Feldman, Cognitive Consistency; Motivational Antecedents and Behavioral Consequents, 1966, Academic Press, p.49
- (8) ibid, p.21
- (9) 潮田武彦, 「職業指導の心理学」, 昭和42年, 川島書店, p.67
- (10) L. E. Issacson, Career Information in Counseling and Teaching, 1966, Allyn and Bacon, p.126 ff
- (11) J. L. Holland, Making Vocational Choices ; A Theory of Careers, 1973, Prentice-Hall p.6
- (12) P. R. Salomone and C. L. Palmer, Career As Pattern and Process, The Vocational Guidance Quarterly, Vol. 26. No.4., 1978, The National Vocational Guidance Association, pp. 291-298
- (13) K. B. Hoyt, Career Education ; Contributions to an Evolving Concept, 1975, Olympus Publishing, p.20 ff
- (14) J. Piaget, L'Épistémologie Génétique, 1970, Presses Universitaires de France, p.13 ff
- (15) J. S. Bruner, The Process of Education, 1966, Harvard University Press, p.17 ff
- (16) 伊藤惣右衛門, 「職業指導の心理学」, 昭和32年, 金澤書店, pp. 14-15
- (17) 同書, p. 410
- (18) 労働省職業安定局編, 「職業辞典」, 第I部, 昭和28年, 雇用問題研究会
- (19) 労働省職業安定局編, 「職業辞典」, 第II部, 昭和28年, 雇用問題研究会
- (20) 「職業辞典」, 第I部, 前掲書, p.5
- (21) 鈴木清訳, 「日本教育改造案」—マ総司令官への米国教育使節団報告書— (Report of The United Staes Education Mission to Japan), 昭和21年, 玉川大出版部, 和文p.54,英文p.30
- (22) 同書, 和文p.54, 英文p.30
- (23) 片岡博, 「職業分類に関する研究」—職業紹介分類の原理に関する一考察—, 1970, 職業研究所, 研究紀要, No.1, p.73 ff
- ・片岡博, 「職業機能分類に関する研究」—米国労働省DOT第III版の分類法について—, 1971, 職業研究所, 研究紀要, No.2, p.106 ff
- ・片岡博, 「職業機能分類に関する研究」—米国DOT (第III版) の職務評定; 体系に基づく, 500職務のクラスター・アナリシスの試行結果について—, 1972, 職業研究所, 研究紀要, No.4, p.30 ff